

作家・明治大学大学院教授

青山

AOYAMA
Yasushi

高密度都市の コンパクトシティを目指す

——二〇〇三年まで東京都の副知事として石原都知事のもとでさまざまな施策を推進されたが、特に印象に残っていることといえば何でしょうか。

青山——都市政策面でいえば、まず一つ目は、都心への問題意識が非常に強くありました。鈴木都政の十六年間は、臨海と新宿副都心政策が中心でした。当時は工業化から情報化の時代のなかで、都心の機能をつくり変えなければいけないという臨界点に達していました。続く青島都政の「東京プラン95」で、やっと都心の機能更新を図るということを公式に宣言。それが石原都政で動き出しました。これは東京の都市政策にとっては大転換だったと思います。

侑

さん

に聞きました

二つ目は首都圏三環状道路の推進を「東京プラン95」で強く打ち出し、高密度に機能を集中した都市、いわゆる「コンパクトシティ」を目指すべきだとして、ようやく環状道路計画が動き出したことです。

そして、三つ目は羽田空港国際化のための四本目の滑走路建設です。その三つが印象に残っています。

価値観は効率性から 快適性へと転換

——東京と海外の大都市のインフラや道路事情を比較して、学ぶべき点がありますか。

青山——まず道路のつくり方が欧米とは根本的に違います。欧米ではほとんどが平地で広い大陸に高速道路のネットワークをつく

っています。日本の場合は、山地が海に迫り無数の島から成り立っている国土ですから、必然的に道路のネットワークが限定されてしまいます。ベルリンやフランクフルトではビルが上がって見ても山が見えませんが、道路の幅もパリのシャンゼリゼですら一〇〇メートルあります。

二十世紀の都市や道路はどこの国でも効率性を追い求めてきましたが、二十一世紀の都市や道路は快適性を求めるという価値観に変わってきています。その象徴がポストンを貫く往復六車線のセントラルアーテリ―です。かつて高速道路といえは経済発展のシンボルでした。それを地下に埋め、ウォーターフロントとダウンタウンを一体化し、残った



聞き手

溝淵利明
編集委員



加古聡一郎
編集委員



二〇ヘクタールをほとんど公園にしました。しかも、そのために一兆八、〇〇〇億円をかけました。まさに、二十一世紀の価値観は効率性から快適性へと転換しているのです。

オリンピック招致は意義がある

——二〇一六年オリンピックの東京招致についてはどうお考えですか。

青山——東京は世界の大都市に例のない水辺都市です。これを活かしていけば、世界に向けて魅力アップできると思います。そういう意味では、今回の東京オリンピックの計画で、はじめに晴海をメインスタジアムとして打ち出したのは、良かったと思います。



二〇一二年オリンピック招致では、ロンドンが勝ち残りました。ロンドンの会場計画では、ストラッドフォード駅北側の工場跡地地帯を活用します。地域は低所得の移民が多く住み、八〇の言語が使われているイーストエンドで、オリンピックを契機に活気を取り戻すというのがロンドンプランです。こうした会場計画や社会的包容力が評価されたのです。ちなみにIOCにビッド（開催地立候補宣言）を届けたのは十四歳の黒人少女でした。これは移民たちもロンドンでの開催を求めているという

アピールです。東京の場合も、東京なりにどう都市像を打ち出していくか。都市政策的にはオリンピック招致は非常に意義のあることだと思います。

道路ができれば環境が良くなる

——首都圏三環状道路が完成すると、東京はどのように変わるのでしょうか。

青山——圏央道は、直径一〇〇キロで、行政区域を超えた東京大都市圏の形成を促します。拡散型都市構造から集約型都市構造へと、世界的な流れからすると時代を表していると言えます。

外環は、埼玉外環ができたとき、関越道からきて練馬の大泉インターで降りる車が、一日当たり一万二、五〇〇台減りました。一九六四年の東京オリンピックで環七ができた頃の「道路＝公害」というイメージを明らかにひっくり返し、「道路ができれば環境が良くなる」と私が現職時代に言い続けていた、その象徴となる出来事となりました。これを契機に世論の見方も徐々に変わり、二〇〇

一年の外環凍結解除につながったのだと思います。

首都高の中央環状線は、今年末に新宿線が部分開通する予定で、残る品川線も昨年より事業が始まりました。中央環状線が全線完成すると、都心部の車の流れが抜本的に効率化されます。

また、新宿線と同時に事業が進められている山手通りが二メートルから四メートルに広がり、歩道は二・二五メートルから九・二五メートル標準に変わります。これで並木ができ、自転車専用帯も確保できるようになります。これを契機に日本の道路のコンセプトも、車優先の空間から、人に優しい空間へと変わっていくと思います。

——本日はいろいろなお話をお聞かせいただきありがとうございます。

profile

青山 徹

一九四三年東京生まれ。
一九六七年中央大学法学部法律学科卒業後都庁へ。副知事を四年（財政、都市構造、危機管理、防災などを担当）務める。二〇〇三年に退職。現在、作家、明治大学大学院教授。